

紗綾形(さやがた)



<https://www.shinfujita.com>
free PDF 2020.5.6

図 1、2、3 は正方形グリッドから導き出される「卍」由来の敷き詰めパターンである。「卍」は石器時代から古今東西を問わず人類が好んで使ってきた形象で、それぞれの民族が都合のよい意味付けをしてきた。広く知られるところでは稲妻(パワー)のシンボル化という解釈がある。わが国においては、桃山時代に入ってきた紗綾(中国産絹織物)の地文にこの模様があったことから紗綾形と名付けられたとの説がある。

図 1、2、3 を見ると、同種模様の発展経緯がわかる。いずれも模様の対称分類では p4g という 90 度回転とすべり鏡映を合わせる図形操作で作られるもので、傑作と言われる模様が多い。このさやがたも図形が巧妙に組み合わさるところが、意味付けはさておいても、人々を魅了してきたと思われる。

そしてわが国では図 3 に変形をかけた図 4 がよく使われている。違いは基本グリッドが正方形から長方形あるいは平行四辺形に変わるところで、そのため 90 度による 4 回割り対称は失われて 180 度回転による pgg という分類に変わるのだが、模様を使う側としてはそんなことはどうでもよく、この変形によって印象がよりシャープになるところが重要なのである。オリジナル創作には欠けるがアレンジには秀でていられるわが国民の特性が、この紗綾形の使い方にもあらわれているようで興味深い。

能装束では怒りを表す衣装に用いられるが(図 5)、この紗綾形が流行した江戸後期では女性の着物柄として無邪気に使われていている。現在では歌舞伎や落語、時代劇などの襖にもよく描かれるところから、ただ単純に江戸時代らしい模様として、すっかりわが国に定着している。

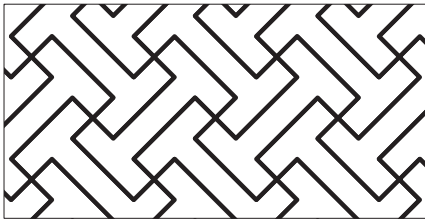


図 1 卍由来の敷き詰めパターン 1

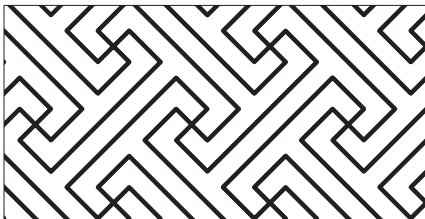


図 2 卍由来の敷き詰めパターン 2

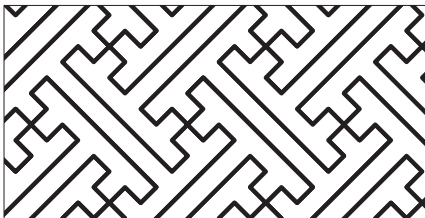


図 3 正方形グリッドによる紗綾形

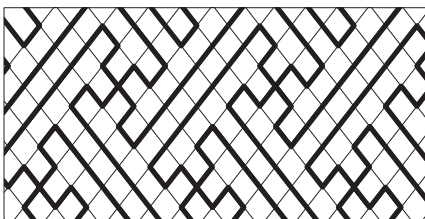


図 4 変形グリッドによる紗綾形



図 5 鉄輪シテ http://www.meg-net.com/meg/oh_noh/ohnou-31.html

麻の葉（あさのは）

模様の対称分類では $p6m$ という最も対称性が高いパターンである。装飾図案を調べる際の基調書に『装飾の文法』オーウェン・ジョーンズという本があるが、この「麻の葉」は中国のページに出てくる。他には出てこない。幾何学が得意なイスラムのページにも出てこない。なぜならば下図そのものであることが考えられる。普通はこの下図をもとにコンパスを入れたり、何かしらのアレンジを試みるところだ（図1、2）。

この模様が日本に入ってきたのは平安時代の仏教美術に付随していたのが由来と言われている。それが江戸後期に、人気がある歌舞伎役者がこの模様の衣装で出演したことで流行したらしい。また成長が早い麻にあやかっ「麻の葉」と名付けられ、赤子の産着の柄としても定着した。このベタな幾何学模様がそれほどまでに流行った理由は、ひとえにネーミングの勝利といってよいかも。ひとたび「麻の葉」と名付けられて出産の縁起物ともなれば、もう安定して売れていくのである。

浮世絵師、鈴木春信の「夕立」という作品にこの「麻の葉」柄をきた娘が描かれている。浮世絵はあたかも着物柄の見本帖でもあるかのごとく、当時の流行を映し出してみせてくれる。特に女物では女性を数多く描いた春信や歌麿の作品が見所満載だ。この「夕立」の屈託ない娘姿と幾何学模様との意外な相性の良さに驚かされる。いや春信のことだから、このモデルは遊女かもしれないが…。



図3「夕立」鈴木春信 A Young Woman in a Summer Shower | Museum of Fine Arts, Boston

青海波 (せいがいは)

模様の対称分類では、左右対称がひし形グリッド上に展開するパターンを cm と名付けているが、青海波がこの cm の代表的パターンである。この種のウロコ状配置のパターンは古くから世界各地でさまざまなバリエーションが作り出されてきたので起源を特定するのは不可能だ (図 1)。わが国においては、古墳の埴輪に似た模様があるところから飛鳥時代とする説や、雅楽の曲名に「青海波」があるところから平安時代とする説がある。また江戸時代、漆職人の勘七が特殊な刷毛で描いた波文で工芸品を手掛けて、それが「青海波」と呼ばれて普及したという説もあるが、いずれも実証の決め手に欠けるところがあるようだ。

江戸後期、町民文化が全盛期を迎えた時に、着物も産業としてピークに達した。そこではありとあらゆる柄が作り出され、流行らせるための知恵が駆使された。青海波もさまざまなバリエーションが生み出されたが、そのなかで今日お馴染みの三本ないし四本ラインのスタイルが一番に普及し、定着したとみてよさそうだ (図 2)。

「青海波」の意味づけとしては、穏やかな波を平和に見立てた縁起が謳われている。喜多川歌麿が描く「青海波」は色合いからして海というより草叢なので、そんな意味づけよりも流行柄であるかどうかでこの女性がこの着物を買ったようにも思える。もちろん、いつの時代でも売り手の最もらしい故事来歴トークにおどらされることに変わりはないので、購買にあたって縁起口上が後押ししたことも十分に考えられるが…。

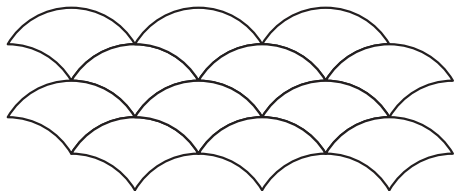


図 1



図 2



図 3 Utamaro Kitagawa "Mother Bouncing Baby with Fruit in her Lips" c.1803
<https://www.pinterest.jp/pin/385339311869951904/>